九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

A Minimalist Approach to the θ-system

萱嶋, 崇

https://doi.org/10.15017/4059960

出版情報：Kyushu University, 2019, 博士（文学）, 課程博士
バージョン：
権利関係：

氏　　名　：萱嶋　崇

論 文 名　：A Minimalist Approach to the θ-system
(θ システムへのミニマリストアプローチ)

区　　分　：甲

論　文　内　容　の　要　旨

本論文は、名詞句の意味と統語構造における分布に対する従来の分析を、現行の生成文法理論の観点から捉えなおすことにより、統語部門と意味部門との間のインターフェイスを解明することを目的としたものである。また生成文法理論は英語のデータを基盤として発展してきたことから、名詞句の人称や数に関する素性(φ 素性)が重要な役割を担う理論となっている。日本語などはそのような素性を持たない言語であるが、本論文で提示される枠組みはこの φ 素性に依存しないものであり、生成文法理論の記述的、説明的妥当性を高める。

第 1 章を導入とし、本論文の動機と目的、概略を述べた。第 2 章では、現行の生成文法の枠組みが提示される Chomsky (2013, 2015)を、また日本語の分析として Saito (2014)を概観し、その問題点を指摘した。加えて Rizzi (1991)のカートグラフィー分析、Dowty (1991)と Jackendoff (1990)の意味役割に基づくマッピング理論を概観し、これらの先行研究を vP 領域に適用することで、指摘された問題点が解決され得ることを示唆した。

以上の先行研究を踏まえ、3 章において意味役割を素性として扱った vP 領域におけるカートグラフィー分析を提案した。また、従来想定されてきた意味役割を細分化した素性(θ 素性)の照合に基づく格照合メカニズムを提案し、Saito (2014)では捉えられなかった与格の照合メカニズムと関連する統語現象を射程に捉えた。

4 章において、3 章での提案をもとに日本語の現象を分析した。能動文、受動文、使役文、そして心理動詞の項構造を精査することで、全構文に共通したカートグラフィーを記述した。また 3 章で提案された格照合メカニズムによって、それぞれの構文で出現する与格名詞句の分布を正しく予測することができることを示した。受動態の分析では、Kuroda (1992)によって詳細に論じられているニ受動態とニヨッテ受動態が、それぞれ θ システムを利用した構文とそうでない構文に分類され、その統語的、意味的特性が捉えられた。使役文の分析においても同様に、ニ格使役とヲ格使役の統語的、意味的特性が θ システムの下で説明されることを示した。

また Harada (1972)で存在が確認された二重ヲ格制約が、使役文において他構文よりも強い形で観察されることについて、これらの構文を意味役割の観点から分析することにより解決できることを論じた。心理動詞の分析では、ニ格心理動詞の受動化、使役化に対する特異性を、本論文で想定しているカートグラフィーに基づいた項構造を同心理動詞に当てはめることにより説明した。

5 章では、英語が θ システムを部分的に採用していることを示した。同言語は φ 素性を有するため全ての統語派生において θ 素性が必要ではないが、φ 素性によって派生した構造の上位に θ 素性で構成される統語構成素を導入することにより、特殊な意味、統語的性質を持つ構文が派生される。Get や have が受動文、使役文で使用される事実、また let や have が受動化できない事実が本論文の枠組みで捉えられた。また心理動詞構文において観察される逆行束縛現象が、本論文で提案した θ システムを同構文の派生に想定することで説明できることを示した。

6 章では、TP 以上の領域において談話素性がラベリング、格照合について必要不可欠であることを示した。持続性のある状態、また習慣を表す個体レベル述語(ILP)の主語は直接 TP 指定部に導入されるため(Diesing (1992))、θ 素性を持たず、本論文の枠組みではラベル付けに際し問題となり格照合もされないことになる。よってこのような名詞句は義務的に談話素性を持ち、この素性によりラベル付けと格照合が行われる。この想定により、ILP の主語が焦点要素として解釈される事実が捉えられた。また可能文において与格主語は対格目的語と共起できない現象は Ura (1999)において原理的な説明がされているが、与格主語が話題化、焦点化されることで文法性が向上するという例外を指摘し、本論文の枠組みにおいて正しい説明が可能であることを論じた。

第 7 章において本論文における議論を総括し、φ 素性を欠く言語では θ 素性を基盤とするシステムによってラベル付け、格照合が行われていることを確認した。θ 素性の採用の仕方には 2 種類あり、日本語のように厳格な階層性を v に設定する場合と、英語のように θ 素性を組み合わせて語彙項目を形成し活用する場合がある。このように θ システムを採用することで、現行の生成文法理論が捉えられる範囲が拡大され、同理論の記述的、説明的妥当性を高めることができることを主張し、本論文の結びとした。